

明朗悲歌

島田修三

ほくはいま湯麵作りのウンノウを極めんとしている最中だ

鯽のアラ炊きつつこころととのふるへ本なら熟読 人には丁寧

「論語」を貫く精神を思うと、しばし心が洗われるような気がする

不義にして富むニツポンの俺である阿阿志夜胡志夜こは嘲笑ふぞ

他人の議論を冷やかして聞いているのは実に愉しい

はて何を言つてゐるのか澄明を欠くゆゑよろしニシベススム氏

空を飛ばうなんて悲しい話をいつまで考えているのさ(加藤登紀子「この空を飛ばたら」)

いま俺のこころをいはば浅小竹原腰なづみつつ空恋ふる鳥

薄命そんな級友なのだった

死者がまた死んでゆくかな夢見より醒めてしばらく神冷えやまず

天白川のほとりを末娘を連れて半日歩いた

声、雑音、議論きつぱり届かざる川のほとりにこころを置くも

UWFの前田のくぐもったようなユーモアの感覚はいい

息づきて老いてイノキのおとがひの尖る先端おそらく欠ける

をさなごよいまし汝が父はごえ才ざいうすくおふ汝負へばたかしら竹群たけぐむに来も（宮柵二）

マミおぶひ父は仰ぐも西空の霜降肉のやうなる夕焼け

慶州でタクシーに乗ったら、いきなり二二〇キロも出すのである

バナナ高価なことをかしく懐かしく南大門市場思ひ出すかなナンデムン

アニメ版「鉄腕アトム」の最終回は崇高でさえあった（手塚治虫死す）

和登知代子すずしく凜々しく描かれてゐるそうでゐない少女であつた

ギルバート・オサリバンの「アローンアゲイン」を聴きながら

雲丹すすり海鞘喰ひちぎりひとときを海幸彦のごとく華やぐ

子供たちの会話に口を出してみる

氣ばたらきすばやき子にて長男の親友イマタラ胃カタル氣味とぞ

買物袋がいくら大きくたってリッチな気分にはなれないね

百千足るあつばあみどるの幸福にあふれ愉しも東急ハンズ

歌つてものはね、初恋の相手みたいなものだから（窪田空穂）

短歌はも生くる謂とはいふものを心ちかごろほとほと襪履

どちらかというフランスの女優の方がいいのだが、例えばジャクリヌ・ササルみたいな

ポスターのやや儼たるが挑発をやめず肌脱ぎリタ・ヘイワース

鎌倉八幡宮の〈学業進学成就御守〉というのを返しそびれて、まだ財布に入れてある

芝の上に棄てられるたる自転車に守札ぞあるナントカ八幡

ブラターズの「トゥワイライトタイム」が聴きたい気分

黄昏くわんこんの翳たまりゆく廊の果て死者か生者か杙のごとた行つ

疵のない魂なぞあるものか（ランボー）

敗れざる者などゐたかうらうらに照る春日こそ鬱陶しけれ

ボクの友人が細君のラマーズ法につき合つて卒倒した

偽産クバレデとふ男の出産儀礼にて産めざるものは淋しきこととする

この道は まるで滑走路 夜空に続く（松任谷由美「中央フリーウェイ」）

おお一瞬にデトマソ・パンテラ駆けぬけて春高速道路フリーウェイしましくを閑

湘南電車の終電で見かけた作家は疲れ果てているようだった（阿部昭死す）

阿部昭しみじみ読みたる過去すまゆきにわが人生ときの時間ときこそこここれ

風呂から上がつてすっぱだかで逃げ回る子をつかまえるには、ちょっとしたコツがある

〈棄子行〉に稗史は満ちて湯上がりの子の真はだかの溶けゆくごとし

夜中の3時に寝静まった台所を漁るような人間には、それだけの文章しか書くことはできない(村上春樹「風の歌を聴け」)

もはらもはら修身齊家にほど遠く父はも飢ゑてキチンもとほる

ブータンのライ族には、おまえとそっくりな顔したのがゴマンといるんだ、とヤツは笑う

ブータンに入りびたりなる男にてウス汚れゆく風体さはやか

脳の襞にシラミがびっしりと詰まっているような気がする、と確か芥川龍之介は書いてたっけ

魔が現われ拍手喝采する気配神経そよぐ夕まぐれである

生れて死に生れて死にゆく現し世の秋おそろしく深き闇あり(大下一真)

目醒むとはいかなることか更科庵天麩羅蕎麦の来るまでを思ふ

やさしい心の持ち主は いつでもどこでも われにあらず受難者となる(吉野弘「夕焼け」)

今日触れし優しい心こころ凧ぎ子の『コロコロ』を父は読むのだ

ほくは行きつけの店というものを作らないようにしている

純喫茶(ヘミキちゃん)出でたる暗がりにパンチパーマがひそとたたずむ

明るいだけの人は淋しい（糸井重里） 　つてのは、ホントだ

暗愁と小さく書くなりクラクラと愁ふる夕べもなくなりしかな

上流から水面をなめらかに掃きながら風が走ってくる

欄干に凭りつつ夕べ見てゐるは底より暮れて帰らざる水

蛇口からほとぼしる水を幼いママがつかもうとしている

ひと夜さに水に化すとふマンボウの記事読みてより元氣ぞもどる